

第1節 資料館における展示・情報公開活動

1. 第31回企画展『遺跡に行こう！～家族で楽しむ遺跡公園～』を開催

平成23年度は、山口市内に所在する「遺跡公園」にスポットを当て、企画展を開催した(開催期間:平成23年6月27日(月)～10月7日(金))。対象とした遺跡公園は、①吉田遺跡(山口大学吉田構内遺跡遺跡保存地区2箇所:山口市吉田所在)、②天神山古墳公園(山口市吉敷佐畑所在)、③丸山遺跡「弥生の家」(山口市仁保下郷所在)、④大内氏館跡(山口市大殿大路所在)、⑤朝田墳墓群(山口市朝田所在)の5箇所である。

本学では、昭和41年(1966)に始まる山口市吉田地区統合移転工事に際し、移転予定地に弥生時代を筆頭に各時代の遺構・遺物が埋存されることが明らかとなり、学長を団長とする「山口大学吉田遺跡調査団」が結成され、小野忠熙氏を中心に緊急発掘調査が実施されることとなった。緊急発掘調査は各学部校舎等の建設と並行して実施され、大多数の遺跡情報が「記録保存」という形で残される結果となったが、全学的な議論の下、学術的に極めて重要と考えられる第1学生食堂横の地区について「遺跡保存地区」という名称で地下に現状保存することが決定され、その後長い年月をかけて「遺跡公園化」を図った経緯がある。今回は、本学遺跡保存地区に合わせ近隣の遺跡公園を素材とし、発掘調査の経緯が異なり、開発主体や地域住民の意識も異なる環境下で、どのように遺跡保存への意識が高まり、公園化され、現在どのように活用されているのかを考察し、解説パネル化すると同時に、実際に現地で見学いただくため、遺跡公園へのルートマップを配付した。また、当館が所蔵する吉田遺跡出土品以外に関しては、②～④遺跡の出土品および④に関連して宴御膳献立復元の食品サンプルを山口市教育委員会より、⑤遺跡の出土品を(財)山口県埋蔵文化財センターより借用して実物展示を行った。

展示を見学いただいた方々からの反響は大きく、実際に遺跡公園の探訪に挑戦した方から電話にて「遺跡が見つかりません。どこにあるのでしょうか」という問い合わせや、「せっかくの貴重な遺跡公園の現状がひどい。もっと有効活用すべきではないでしょうか」という声も多数聞かされた。

本学および山口市に限らず、全国的にも整備後の遺跡の保存・活用には課題が山積されていると聞く。容易に正解の得られない問題と思うが、このような機会を通じ、学内外に問いかけができたことは一つの成果と言えるであろう。



写真 53 第31回企画展ポスター



写真 54 展示の様様

2. 第32回企画展『でた！～山口大学発掘調査速報展2011～』を開催

当館は、数年に1度の間隔で発掘調査速報展を開催している。前年度末に計画した平成23年度展示計画では、平成23年度上半期実施予定の発掘調査により出土した資料を主として展示する予定であったが、埋蔵文化財保護の観点からは幸運なことに開発計画の変更により発掘調査が中止となる案件が出たため、展示スペースの半分(オープン展示スペース)を「発掘調査の方法」を紹介するコーナーとし、展示ケース内にて平成21年度冬から平成23年度秋までに実施した構内遺跡の発掘調査成果を公開した(開催期間:平成23年11月5日(土)～平成24年1月27日(金))。

発掘調査速報展の構成は、①平成22年度に2度実施した山口大学医学部構内遺跡の予備発掘調査成果(昨年度刊行「年報8」所収)、②平成23年度に実施した吉田遺跡の本発掘調査成果(本書所収)、③平成21年度に実施した吉田遺跡の立会調査成果(一昨年度刊行「年報7」所収)、④平成20年度から23年度にかけて行った内業調査で得られた成果の4部構成とした。

当館では、現地における発掘調査から内業調査を経て発掘調査概報(年報)刊行まで約3年の歳月が必要となっており、必然的に発掘調査速報展では出土品調査および遺跡の評価が不十分なまま資料を公開しなくてはならなくなる。本学教職員および学生への「速報性」を重視しての事業実施であるが、今回は新たな視点として「工事立会の意義」と「現地調査で見落とされる遺跡情報」を展示内容に取り入れたことにより、当館の埋蔵文化財保護業務を多岐にわたり紹介することができたと感じている。

本展示は約3ヶ月の開催期間中、500名を越える方々に観覧いただいた。アンケート回収率も約9%と通常の回収率を大きく上回り、当展示への関心の高さが伺えた。「最も印象に残った展示物」への回答は、④コーナーで展示した、「墨書「安」が記された須恵器」が他を圧倒しており、展示意図が上手く伝わっているようであった。また、発掘調査や遺物の整理作業を体験してみたいとの声も複数届けられた。

諸処の事情により、当館では毎年発掘調査速報展を開催することは困難であるが、今後も開催時には「新たな視点」や「新たな手法」を意識した展示の構成を行いたい。

【註】

1) 近年では、平成18年度開催『吉田遺跡発掘調査速報展2006』、平成21年開催『土の中からコンニチワ～山口大学発掘調査速報展2009～』などがこれに該当する。



写真 55 第32回企画展ポスター



写真 56 展示の様様

3. 山口県大学ML連携企画巡回展『風化させない記憶への一步～自然とともに～』

山口学会場展を開催

平成22年度、当館は梅光学院大学博物館（山口県下関市所在）との連携により大学博物館連携第1弾 交流展『EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館』を開催した。具体的な事業としては、構内遺跡を中心とした当館収蔵品を梅光学院大学博物館にて、大学史資料を中心とした梅光学院大学博物館収蔵品を当館にて展示するというものであったが、初の試みということもあり試行錯誤を繰り返しながらなんとか無事に事業を完了することができた。

展示終了後、梅光学院大学博物館と次年度事業の打ち合わせを複数回行ったが、館種の違いからテーマを共通とする連携展示の開催が困難であること、さらには当県において博物館施設を有する大学が本学と梅光学院大学だけであり、今後の事業発展ビジョンが描けないことなど問題点が表出した。

そのような状況下の平成23年(2011)3月11日、未曾有の地震災害が東日本を襲い、当館は梅光学院大学博物館とともに、山口県の大学博物館ができる支援は何かを考えることとなった。その結果、東日本から遠く離れた本州最西端に身を置く我々には限られるが、思い続けることはできるという共通意識が生じ、東日本大震災を西日本においても「過去の記憶」としないため、「人と自然との共生」を共通テーマに各館のグランド・イメージにもとづく展示活動を実施することとなった。

また、県央部に所在する当館と県西部に所在する梅光学院大学だけでなく、県内広域に活動を広げるため、本学図書館と梅光学院大学図書館も主催に加わり「山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携事業」が組織され、山口県大学図書館協議会の協力の下、半年をかけて県東部、県西部を含む県内4大学を巡回する展示事業が企画された。

展示タイトルは『風化させない記憶への一步～自然とともに～』に決定した。各館の展示に関しては当館が『海と生きる～遺跡出土遺物に見る海の恵み～』、山口大学図書館が『災害の歴史と防災』、梅光学院大学博物館が『藤山一雄の〈周東のヒヨコ〉～明日を生きる～』、梅光学院大学図書館が『宮澤賢治～雨ニモマケズ～』というタイトルで実施することに決定した。

その他、事業準備過程で梅光学院大学東北ボランティア実行委員会の被災地でのボランティア活動報告も展示に加えられることとなり、さらに被災地への募金活動や被災者へのメッセージボードの設置な



写真 57 展示ポスター



写真 58 山口学会場（埋蔵文化財資料館）の様様

どが付加されていった。

展示の巡回開始は東日本大震災1年後の平成24年(2012)3月11日に決定され、結果として年度をまたぐ事業となった。以下にその巡回スケジュールを記載する。

巡回スケジュール

- ・山口大学会場 平成24年(2012)3月11日(日)～4月27日(金)
- ・梅光学院大学会場 平成24年(2012)年5月11日(金)～6月26日(火)
- ・徳山大学会場 平成24年(2012)年7月2日(月)～8月10日(金)
- ・山口福祉文化大学会場 平成24年(2012)年10月1日(月)～11月9日(金)

3月11日にオープンした山口大学会場では、展示スペースの問題から、当館展示室と図書館1階ロビーの2箇所を会場とした。当館と梅光学院大学博物館、梅光学院大学図書館が前者を会場とし、本学図書館と梅光学院大学東北ボランティア実行委員会が後者を会場とした。

当館は博物館施設ではあるが、収蔵品は埋蔵文化財(考古資料)に特化している。埋蔵文化財は過去の人類生活に直結する資料と言えるため、何れの資料を素材としても「自然との共生」という共通テーマに関連づけることは可能と考えられたが、このたびの震災被害の大きな要因が巨大津波であることを鑑み、海をテーマに展示を構成することにした。長らく島国である日本列島においては、たび重なる海の脅威に直面しながらも、人類はその恵みを受け続け、生命を繋いできた。今回の震災被害に対しても、「防災」という意識を疎かにしてはいけないが、再び人類が海と共生できるよう、『海と生きる～遺跡出土品に見る海の恵み～』と題し、当県沿岸部の土器製塩関連資料と蛸壺漁関連資料の展示を行った。

全体的な展示構成に関しては、図書館会場では梅光学院大学ボランティア実行委員会が被災地で行った活動の報告パネル展示と、本学図書館の山口の災害史と本学における防災研究解説展示が連携していたため、観覧者から高評を得たが、埋蔵文化財資料館会場では展示室左手に梅光学院大学博物館による大正期の旧教諭、藤山一雄氏の敗戦・復興関連の資料および解説展示、右手に梅光学院大学図書館による宮澤賢治「雨ニモマケズ」の紹介と解説展示、奥手に当館の海関連考古資料の展示となったため、観覧者からは「コンセプトが伝わりづらい」との指摘を多数受けた。

一方で観覧者からは「応援すれば済まされる問題ではない。なるべく具体的な支援ができればと思う」(女子大学生:福岡県)「春にボランティアに行く予定」(一般女性:東京都)「震災を忘れない。自分の身に起こったときに生かす」(男子高校生:徳島県)「このような貴重な展示をありがとうございます。復興に向けて頑張っていきます」(一般男性:宮城県)など、展示主旨に対する様々な声が聞かれた。

山口大学会場以降の事業報告および総括に関しては、次年度年報に掲載する予定である。



写真 59・60 山口大学会場(図書館)の様



写真 61 設置した募金箱と缶バッジ

4. 平成23年度刊行物

1. 『山口大学埋蔵分解資料館年報—平成20年度—』を刊行

平成23年度は、平成20年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行した。発掘調査関係としては本発掘調査3件(吉田)、予備発掘調査4件(吉田・小串・常盤)、工事立会4件(吉田1・白石1)の成果が掲載されている。件数こそ少ないが、主として本発掘調査において遺構・遺物が密に確認されたこともあり、構内遺跡発掘調査概報部分だけで220頁を超えるボリュームとなった。

館の活動報告としては、展示・公開活動として10件の企画展示等事業と、3件の社会教育活動を報告している。その他、館員田畑による「周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」と題する付篇を所収している。

2. 館蔵資料調査研究報告書2『見島ジコンボ古墳群 第151号墳出土資料調査報告』を刊行

平成22年度に開始した事業であるが、引き続き、見島ジコンボ古墳群の出土資料調査及び報告書の刊行を実施した。

平成23年度は、当館において鈿帯や耳環などの装身具とともに、鉄刀や刀装具、鉄鏃など武器類、刀子など工具類が収蔵されている第151号墳を調査対象とした。萩博物館収蔵品の調査は平成23年(2011)12月1日～22日にかけて館員横山・松浦・乃美が実施し、当館所蔵品と合わせ報告を行ったが、調査過程において当館バックヤードより『見島総合学術調査報告』(1964)に掲載された見島ジコンボ古墳群石室図のトレース原図が発見され、可能性は指摘されるものの確信を得るに至らなかったガラス小玉1点が第154号墳出土品と認定されたため、付篇に補遺として報告した。その他、第151号墳出土人骨に関し、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸・松下真実両氏に玉稿を賜った。

3. 季刊山口大学埋蔵文化財資料館通信 第22号『てらこや埋文』を刊行

平成18年(2005)より刊行している季刊広報誌である。平成23年度は、平成20年度の年報作成で多忙であったため、「春夏秋冬特大号」と称し、年度末に頁数を倍増して刊行した。トップページには当館リニューアル記事を掲載し、当館の活動報告の他、「山口県内の博物館」コーナーにておすすめ歴史美術館(山口市湯田温泉所在:平成25年(2013)4月7日をもって閉館)を紹介した。また、2年間の任期を終えて退任する額額厚館長(現:本学理事・教育学生担当副学長)のインタビュー記事を掲載した。



写真 62 平成 23 年度埋蔵文化財資料館刊行物